

『死について』

「さっきまで死のことを考えていた」と彼は言った。僕は何も言わず、ただその続きを待っていた。電話越しに聞こえる彼の側の沈黙は、なぜかひどく重たく感じられた。

「実を言うと今日一日ずっとそのことを考えていたんだ」と彼は続けた。「なぜかは分からない。あるいは朝からずっと雨が降り続いていたせいかもしれないし、たまたま人生のそういう時期に当たっていた、というだけなのかもしれない。なあ、君はどうだ？ 今日死について考えたかい？」

僕は今日一日仕事をしていて、死について考える暇なんかなかった、と言った。

「まあそうだろうな」と彼は言った。そしてしばらく何かを考え込んでいた。僕はその間、携帯電話を持ったまま、ただ漠然と自分の部屋を眺めていた。そこはなぜかいつもよりずっと薄暗いように感じられた。でも気のせいかもしれない。「なあ」とやがて彼が口を開いた。「君は死とはなんだと思う？ 我々はどうして死ぬんだと思う？」

死とは生命あるものが生きるのをやめることだ、と僕は言った。そしてそれはおそらく、誰にも避けることのできないものなのだ、と。

「それじゃあ」と彼は言った。「君は死の^{かたまり}実在を信じないのかい？ 例えば手に取れるような死だ。ほら、ちょうど黒い塊^{かたまり}みたいに」

そういうものはまだ一度も見たことがない、と僕は言った。

「俺はさ」と彼は言った。「どこかに、つまり俺たちの身体のどこかに、そういう部分があるんじゃないか、という気がするんだ。それはつまり『死の塊^{かたまり}』だ。それは俺たちが死ぬ瞬間までじっと息を潜めている。身動き一つせず。完全に気配を消して。でも最後の最後に突然身体中を覆い尽くすんだ。そして俺たちは死ぬ。俺は自分の中にそういう部分があるような気がするんだよ。君はそうは思わないか？」

比喩的な「死の塊^{かたまり}」というのなら理解できる、と僕は言った。

彼は電話の向こうで首を振った。そういう気配が感じられた。「いや、これは比喩じゃない。全然比喩なんかじゃないんだ」

彼はその後じっと黙り込んでしまったが、僕は何も言わず、ただ彼に考えさせておいた。きつと続きがあるのだ。

「あのさ」と案の定彼は続けた。「もし死がなかったら、『生』という言葉も存在しなかったんじゃないかと思うんだ。君はそれについてはどう思う？」

「あるいはそうかもしれない」と僕は言った。「でも実際にそういう状況に身を置いたことがないから、本当のところは分からない」

「俺たちは今生きている」と彼は言った。「それには君も同意するだろう？」

同意する、と僕は言った。

「でも俺にはよく分からないんだ」と彼は言った。「全然分からない。実を言うと今日の午前中、ずっと素っ裸で鏡に自分の姿を映していた。そしてこう思ったんだ。一体こんなものがこの世に存在している意味が、どこにあるんだろうってな。俺は今までたくさんの豚

とか、牛とか、^{とり}鶏を喰ってきた。魚も喰った。果たして俺はそんな^{せっしょう}殺生に値する人間だったんだろうか、とな」

君は考え過ぎている、と僕は言った。そんなことを言い出したら切りがないだろう、と。「でもさ、俺には分からないんだよ。だってほかの人々は・・・」

そこで突然回線が途絶えた。僕は何度か呼びかけてみたが、聞こえてくるのは単調な電子音だけだった。僕の方の携帯には何の問題もなかったから、それはおそらく彼の方の問題だったのだろう。数分後に僕は電話をかけ直してみたが、そのときもまた無機質な電子音が鳴るだけで、いつまで経っても電話は^{つな}繋がらなかった。

再び電話が鳴ったのは、次の日の早朝だった。僕はまだ夢の中にいたのだが、暴力的な着信音がそれを打ち壊した。バラバラになった夢の断片は——それは珍しく穏やかな夢だったのだが——^{かなた}虚無の彼方へと消えていった。それが再び回収されることは、おそらく永遠にあるまい。

「もしもし」と僕はまだ半分眠り込みながら言った。「どうしたんだ？」

でも聞こえてきたのは、ひとしきりの沈黙でしかなかった。僕は声を大きくしてもう一度言った。「もしもし！ 何かあったのか？」

「・・・これは俺じゃない」と彼は言った。彼は確かにそう言ったのだ。これは俺じゃない、と。それはどういうことなんだろう？

「それはどういうことなんだ？」と僕は訊いた。

「俺が俺じゃなくなっている」と彼は言った。「とにかく^{うち}家に来てほしい」

「だって僕は今から会社に・・・」

「これは緊急事態なんだ」と彼は言った。「会社も大事だが、これはおそらく君にとっても大事なことなんだ。頼むから少しでも時間を割いてくれないか？」

僕は溜息をついて時計を見た。今から彼の家に行ったとしても、急げばなんとか会社間に合うかもしれない。

「分かったよ」と僕は言った。「今すぐ向かうから」

「恩に着るよ」と彼は言った。

彼の家は僕のマンションから電車を乗り継いで三十分ほどのところにあつた。まだ朝は早かったが、駅にはたくさんの通勤客の姿が見られた。彼らはみな一様に、速足で黙々と歩いていた。彼らはこれから仕事に向かうのだ、と僕は思った。きっと死のことなんか考えている暇はないだろう。

僕は彼の家からそのまま会社に行けるよう、スーツを着て電車に乗っていた。この時間帯にそちらの方向に行くことはめったにない。そういう普段とは違ったことをしていると

いう意識が、^{わず}感覚に僅かなずれを与えていた。僕は周囲の人々を見回したが、少なくとも今のところは、僕は彼らの側に属してはいなかった。彼らは今生に向かっているが、僕は

今死に向かっているのだ、となぜかふと思った。そして少しの間、頭の中で死について考えていた。

マンションに着いてドアベルを鳴らすと、すぐさま彼が応答した。「すぐ行く」と彼はインターフォン越しに言った。

彼は言った通りすぐにドアを開けて僕を中に招き入れた。見ると彼はまだパジャマ姿のままだった。白と水色の縞模様のパジャマだ。ぱっと見ると、それは穏やかな——きっと軽犯罪者用のものだ——囚人服のようにも見えた。我々は黙ったまま廊下を抜け、居間に向かった。部屋にはあまり物がなくて、がらんとした印象を受けた。彼は僕を中央のソファに座らせた。

「それで」と僕は言った。「何があったんだ？」

彼は僕の前にじっと立ったままでいたのだが、やがてこう言った。

「なんだ気付かないのか？」

「気付かないって何に？」と僕は言った。

「これだよ」と彼は言って右腕を上げ、パジャマの袖を肘までまくった。しかし僕には何のことやらまったく分からなかった。いつもの彼の右腕じゃないか。

「右腕がどうしたんだ？」と僕は言った。

彼は首を振り、こう言った。「いいかい。よく見てくれよ。これは俺の右腕じゃない。誰かほかの人間の右腕だ。そんなの一目見れば分かるだろうに」

でも僕にはそんなことは信じられなかった。誰かほかの人間の右腕？ どうしてそんなものがくっついているのだ？ そんなことが実際にあり得るのだろうか？

「でも実際に起きたのさ」と彼は僕の心を読んだように言った。「これがその証拠さ」。そして腕についた一つのほくろを指差した。

それはごく小さいほくろで、僕にはなんらおかしいところがあるようには見えなかった。「これは昨日まではあと三センチ肘の方に付いていた」と彼は言った。「奴らはうまくカモフラージュしたつもりだろうが、俺はすぐに気が付いた。それに動かした感じも全然違う。なんというか、もっと関節がぎこちなかったはずなんだ。それなのに今はこんなにスムーズに動いている」

そしてまるでチョップするみたいに、何度も空中で肘を曲げ伸ばしした。

僕は言った。「奴らって誰なんだ？ 君にはその見当が付いているのか？」

『奴ら』とはおそらく死の領域に潜む人間だ」と彼は言った。「昨日の夜死の話をしただろう？ きっとあれがいけなかったんだ。あのせいで俺は眠っていた奴らを刺激してしまったんだよ。おそらく人間は本来死のことなんか考えてはいけないだろう」

でも僕には分からなかった。彼は本当にそんな人間の存在を信じているのだろうか？

「なあ」と僕は言った。「もし百歩譲ってそんな人間がいたとして、君の腕は元に近い状態でくっついているじゃないか。これがもし腕がなくなっているんだったら問題だよ。でも今はくっついている。それも前よりもスムーズに動く状態で。それなら大した問題はない

んじゃないかな？」

それを聞くと彼は、何も分かっていない、という風に首を振った。「君は何も分かってない」と彼は言った。「いいかい。こんなのは序の口に過ぎないんだ。彼らは明日にでも左腕^{あす}を奪い、あさってには右脚を、その次には左脚^{あし}を奪うだろう。そうしたら次はどこだ？ 頭とか、心臓とかだ。そして最後にはきっと俺の精神の核ともいえるものを持って行くだらう。そこまでいったらもうおしまいだ。そこにいるのはもう、俺ではない『別の誰か』ということになる。そんなのは自明のことだと思っていたけどな」

僕はなんとか頭を働かせた。しかしそれでも状況をきちんと把握するには至らなかった。「君はそういうことになるかと確信している」ととりあえず僕は言った。「これは確信だよ」と彼は言った。「俺にはそれが分かるんだ」

「君は昨日『死の塊^{かたまり}』、ということをやったな」と僕はふと思い出して言った。

「ああ、言ったよ」と彼は言った。「それがどうした？」

「もしかして奴らの狙いはその死の塊なんじゃないのか？」

彼はそれを聞くと少し驚いたみたいだった。「死の塊を？ どうしてそう思うんだ？」

「いや、根拠なんか無い」と僕は言った。「ただ昨日君がその話をして、それで今朝こんなことが起こった。そこにはなんらかの繋がり^{つな}があると考える方が自然だろう」

「でもそんなものどうするんだ？」と彼は言った。「死の塊なんて、一体何の役に立つんだ？」

「そんなこと僕には分からない。奴らに実際に聞いてみないと」

そこでふと時計を見ると、もう仕事に行くべき時間だった。彼は裕福な親の仕送りで生活していたから（もう三年になる）、仕事に行く必要はない。しかし残念ながら僕はそれほど恵まれた境遇にいるわけではなかった。日々の糧^{かて}をこの手で稼がなければならないのだ。「もう行かなくていい」と僕は言った。そしてこう付け加えた。「しかし君をこのまま置いていっても大丈夫なのだろうか？」

「奴らはきっと日の出ているうちには来ない」と彼は言った。「なんとなくそういう気がするんだ。彼らは闇の住人だ。きっと夜の深いうちにしか行動しないだろう」

僕は彼の家を出て、会社に向かった。彼には、何か変わったことが起きたらすぐに連絡を寄こすように、と言っておいた。そうする、と彼は言った。

会社で仕事をしている間にも、僕は彼のことを考え続けていた。果たして本当に彼の言った通りなのだろうか？ 彼の右腕は、実際にほかの誰かのものと取り換えられていたのだろうか？ もちろん常識に照らせばそんなことはあり得なかった。一体どこの誰が、どんな目的でそんなことをするというのだ？ いたずらにしては手が込み過ぎている。考え得る最も妥当な結論は、彼が勘違いをしている、というものだったが、僕にはどうしてもそうは思えなかった。彼は突飛な考えをする男だったし、ほとんど「異常」ともいえる感受性を持ってはいたが、大事なことで間違いを犯す男ではなかった。彼が何か重大なこと

が起きている、と言うからには、それは実際に起きているのだ。

昼休みに彼から電話がかかってきた。

「もしもし」と僕は言った。「何かあったのか？」

「耳なし芳一だ」と彼は言った。

「耳なし芳一？」

「そうだよ」と彼は言った。「朝君と会ったときからずっと気にかかっていたんだ。この状況は何かに似ているぞ、ってね。それでピンときた。これは『耳なし芳一』だ。どこかから悪霊がやって来て、俺の肉体を持って行こうとしている。これから身体中にお経きょうを書くことにする。自分で書けないところは、まあ君に頼むことにするよ。だから仕事が終わったらうちに寄ってくれ。じゃあな」

そして電話は切れた。僕は頭の中で『耳なし芳一』がどういう話だったのかを思い出そうとしたが、小さい子どもの頃に聞いたきりだったので(あるいは本で読んだのだったか)、なかなか細かいところまでは思い出せなかった。僕に思い出せるのは、和尚と小僧が芳一の耳にだけお経を書き忘れた、という最後の部分だけだった。耳なし芳一？

考えてみればそれは不思議な話だった。子どもの頃様々な昔話を聞かされたが、考えてみればこれが一番印象に残っていたかもしれない。もちろん彼が今その題名おしやうを持ち出すまでは、そんなことはすっかり忘れていたわけだが、今ふとその感覚が蘇よみがえってきた。それはぞっとするような——しかしそれでいて妙に好奇心を魅かれるような——不思議なお話だった。耳から血を流す芳一の姿が、ありありと僕の頭に浮かんできた。

その日仕事が終わると、僕はまっすぐ彼の家に向かった。途中コンビニで菓子パンを買って食べたが、食べている途中で、本当はこんなもの食べたくなかったのだと気付いた。それで結局食べ切る前にゴミ箱に捨ててしまった。マンションに着くと、彼がまたパジャマ姿のまま迎えてくれた(軽犯罪者用のパジャマだ)。その顔にはマジックで所狭ところせましとお経が書かれていた。

「これで大丈夫だ」と彼は安心したように言った。

居間に行って、一杯水をもらったあとで僕は切り出した。

「耳なし芳一の話をしていたね」と僕は言った。

「ああ」と彼は言った。「俺は昔からあの話が大嫌いだった。なにしろ不気味で仕方なかったからな。だって耳をひきちぎられるんだぜ？ 想像してもみなよ。どうして子どもにそんな話をしなくちゃならない？ でも今理解した。俺があの話を嫌いだったのは、いずれ自分が同じような目に遭うと知っていたからなんだ。だからこそ心底ぞっとしたんだよ」

「あの話の細部は覚えているか？」と僕は言った。

「いや」と彼は言った。「全然覚えていない。どうせ大したことのない話だろう」

それで僕は彼に、その日仕事の合間ぬを縫ってインターネットで調べた『耳なし芳一』の

話の細部を聞かせてやった。芳一は盲目の琵琶法師びわだったこと。その腕前に感動した平家の亡霊が彼を墓地に連れて行って、みなで『壇ノ浦の合戦』だん うらのところを聞かせてもらったこと。芳一自身は目が見えず、それが亡霊たちだとは気付かなかったこと。芳一が住んでいた寺の和尚おしょうがそれを危険に思い、亡霊に姿が見えなくなるお経を身体中に書き込んだこと。でも耳だけを書き忘れて、彼と小僧は法事に行ってしまったこと。帰って来てみると、耳から血を流した芳一が倒れていたこと。

「なんで亡霊は耳を持って行ったんだ？」と彼は訊いた。

「亡霊には芳一の耳しか見えなかったんだ。それでその亡霊は、少なくとも自分が命令——芳一を連れて来るという命令——の一部を果たしたことを示すために、そこにあった耳を持って行ったんだよ」

「彼らは悪い亡霊だったのだろうか？」と彼は言った。「あるいはただのメランコリックな音楽好きの亡霊に過ぎなかったのだろうか？」

「分からない」と僕は言った。「しかし和尚の心配にも一理はあったんじゃないかな。それまでも平家の亡霊は悪いことをしていたみたいだったし——たとえば下関海峡しものせきの舟を海に引きずり下ろすとか——いずれ芳一に悪いことをするのは時間の問題だったんじゃないかな」

「ふうん」と彼はお経の書かれた顔をしかめながら言った。「そうすると俺の状況とはあまり似ていないな」

「まあそういうことになるね」と僕は言った。「君は琵琶法師びわではない。百歩譲ってギター弾きでもない」

「俺は俺さ」と彼はぽつりと言った。そこには思いがけず諦念ていねんのようなものが現れていた。そんなものが彼の中に存在するとは、今まで全然知らなかったのだが。

「それでどうする？」と僕は言った。「お経を書くかい？」

「いや、やめた」と彼は言った。「こんなもの役には立つまい」

「でも」と僕は彼がお風呂に入ってマジックを落としてきたあとで言った（もっともそれはほとんどそのまま消えずに残っていたのだが）。「だとすると彼らの狙いは何なんだろう？ どうして君の肉体を交換していくのだろうか？」

「そんなもの分からないよ」と彼は言った。「彼らは平家の亡霊じゃなさそうだしな」

「それでどうするつもりなんだ？」と僕は訊いた。

「君が来るまでは身体中にお経を書けば大丈夫だと思っていた。もちろん耳まできちんと。そう言って彼は、まだお経が消えずに残っている耳たぶを搔いた。「でもそれじゃあ不十分らしい。なんとなくそんな気がしてきた。俺はさ、芳一はつまり生来の業ごうのようなもののせいで、悪霊の理不尽な怒りを買ったんだと思っていたんだ。芳一には自分の何がおかしいのか分からない。にもかかわらず、ある夜悪霊が彼の身体を奪いに来る。慈悲も何もない。そいつはただ自分のやるべきことを果たしに来るだけなんだ。そしてそれを予知した和尚が、小僧と一緒にお経を書きまくる。もちろん耳だけを書き残してな。そして

芳一は命は助かるが、結局耳を失うことになる」

「でも実際にはそういう話じゃなかった」と僕は言った。「亡霊の側にもきちんとしたパーソナリティーが備わっていた。『壇ノ浦の合戦』のところを聞いて涙を流していたくらいなんだから」

「でも俺の中では、話はそうではなかった」と彼は言った。「そして今の俺の状況は、俺の方の話に近いような気がするんだよ」

「じゃあどうする？」と僕は言った。

「本当なら高名な坊さんとか、シャーマンとかに相談するべきなんだろう。でも果たしてこの時代にそんな人間が存在するのだろうか？俺には分からないね。警察に相談することもできないしな。精神病院に入れられるのがおちだろう」

「じゃあ自分たちでなんとかするしかない」と僕は言った。

彼は頷いた。「そう。だからこそ君を呼んだんだよ。こういうことで相談できるのは君しかない」

我々はそこで黙り込んだが、そうこうしているうちにすでに夜は更けてきていた。そろそろ午後九時半になろうとしている。彼はおもむろにテレビを点けたが、野球中継はもう終わっていた。我々はよくこの部屋で一緒に野球を観たものだった。チームには関係なく、試合そのものを観るのだ。

「何が起きているのか君が確かめてくれないか？」と彼は突然言った。

「僕が？」

「そうだ」と彼は言った。「おそらく俺が眠っているときに奴らは来るだろう。起きているときにはやって来ないはずだ。君はその場面を捉えて、なんとか止めてほしい。奴らの蛮行を」

『止める』って具体的にはどうすればいいんだろう？」

「どうやったっていい」と彼は言った。「バットで殴り殺してもいいし、あるいは理を尽くして説得してもいい。君の好きにしてくれればいい」

でも僕にはそんなことが上手くいくとは思えなかった。そもそも僕は誰を相手にそんなことをするのだろうか？それすらもよく分かっていないのだ。

「とりあえず何が起きているのか確かめることはできるかもしれない」と僕は言った。

「そのあとのことは保証できないけれど」

「それで大丈夫だ」と彼は冷静な表情で言った。

彼はその夜何杯か酒を飲んだ。その方が早く眠れるし、あるいは腕をもぎ取られる痛みだっただけ感じないかもしれない、ということだった（もっとも右腕のときはまったく痛みは感じなかったはずなのだが）。彼はまるで死を目前に控えている人のような話し方をした。これが俺の飲む最後のビールになるかもしれない、とかそういうことだ。僕は言った。

「でももし本当に身体のすべてが交換されたとしても、君が死ぬわけじゃないだろう。君はおそらく生き続けられるはずだ。その新しい肉体でもって」

でも彼はただ首を振るだけで、何も言わなかった。

夜十二時頃に彼はベッドに入って眠りに就いた。こういう状況の中で果たして本当にすぐ眠れるのか、と僕は心配していたのだが、それでも彼はあつという間に寝入ってしまった。きっと今朝早くから起きていたせいだろう。彼は今とても穏やかな寝顔をしていた。

僕は彼のベッドから少し離れたところに椅子を置いて、ただじっと何かをやってくるのを待っていた。電気は消して——というのもその方が彼らをおびき出すにはいいような気がしたから——窓のカーテンもびたりと閉じた。どこか遠くの方で救急車のサイレンが鳴っているのが聞こえた。僕は息を殺してただ暗闇を見つめていた。

状況そのものは滑稽だと言ってもよかったが(彼の顔にはまだ油性マジックで書かれたお経が残っていた)、それでも僕は真剣にこの寝ずの番に取り組んでいた。何一つ見逃してはならない、と僕は思った。足元には一応包丁を持ってきてはいたが、実際にそれを使う状況になるのかどうかは分からなかった。そもそも闇の住人に包丁でダメージを与えることができるのだろうか？

僕は頭の中で、前の晩彼が言った「死の塊^{かたまり}」のことを考えていた。単なる生の不在ではなく、手で触ることのできる死の塊。そして交換された彼の右腕、耳なし芳一。「生来の業^{ごう}」と彼は言った。それは本来の物語ではなく、彼のバージョンのお話の中のものだったが、むしろそれだけ彼にとっては重要な観点なのかもしれなかった。生来の業。なにも本人が悪いことをしたわけではない。しかし業^{ごう}のせいでひどい災難が降りかかる。でもどうしてそれが彼なんだろう、と僕は思った。あるいはそれが僕だったとしてもおかしくはなかったんじゃないか？

「それはたまたま彼にその時期がきたからだよ」と暗闇の中で誰かが言った。僕ははっとしてそちらを向いたが、そこには何も見えなかった。ちょうどベッドに寝ている彼の足元のあたりだ。何か黒い塊のようなものが見える気がする。でもそれも気のせいかもしれない。僕はとっさに何かを言おうとしたのだが、なぜか言葉は出なかった。言葉は失われていた。

「しゃべらなくていい」とその声は言った。若い男の声にも聞こえるし、年を取った男の声にも聞こえる。声だけからその持ち主の顔を想像するのは困難だった。「君の考えていることくらい私には簡単に分かる」

あなたは何者なのですか？と僕は頭の中で考えた。

「それを言ってもおそらく君には理解できないだろう」とその声は言った。「我々は君とは違う論理^{もと}の下で生きているから。そこには違う重力があり、違う正義がある」

彼の肉体を奪うのですか？と僕は頭の中で訊いた。

「なにもただ奪っていくだけではない」と声は言った。「昨日だって新しい腕を取りつけてやったじゃないか。いいかい、彼は生まれ変わろうとしているんだ。我々はそれを助けてやっているだけなんだよ」

彼は自分の本質が奪われてしまうんじゃないかと怯えていました。

「本質か」と言ってその声は笑った。暗闇の中に不気味な残響が響いた。「君は本当に彼に本質なんてものがあると思っているのか？」

僕は何とも答えられなかった。

「君は自分の中に本質があると思っているかい？」

僕は考えたが、それでもよく分からなかった。しかし本質に類似した何か、いわば「核」のようなものはあるのではないか、という気はした。その人をその人たらしめている核だ。「核か」とその声は言った。「でも君はそれを実際に目にしたわけではない。そうだろう？」

そうです、と僕は思った。

「君は『死の塊』のことについて考えていたな」とその声は言った。「なあ、その『死の塊』が『核』だということはないかな？」

死の塊が核？ そんなことは思いつきもしなかった。でも僕にはそれは矛盾した考えのように思えた。「死の塊」とはつまり死に属するもので、「精神の核」は、つまり生に属するものだからだ。

「生と死は常に密着している」とその声は言った。「生の中に死があり、死の中に生があるんだ。これから君にそれを見せてやろう」

すると次の瞬間、ベッドの彼の胸のあたりがピカッと光って、そこから何かが浮き上がってきた。それは心臓のようにも見えたが、よく見ると心臓ではなかった。もっとずっと小ぶりで、もっとずっと黒い。それは小さな石のようにも見えたが、石であるはずはない。なぜならそれは、まるで呼吸をするみたいに、小さく収縮と拡張を繰り返していたからだ。

「これが彼の死の塊だ」と声は言った。

僕はそれに魅せられていた。それは美しい輝きを持っていた。もっとも明るく光っていたわけではない。それは黒く光り輝いていた。

「よく見ているんだ」と声が言い、空中に浮かんだその塊の中心が、ぱっくりと縦に割れた。するとその中から何かぼんやりと光っているものが出現した。淡い、青色の光だ。海の色に似ている。僕はじっとそれを見つめていた。

「これが何だか分からないか？」と声は言った。

一体何だろう、と行ってよく見ると、それが彼の**本質**であることに気付いた。あるいは「精神の核」のようなものだ。その光り方は——色こそ違っていたが——彼の目の輝きとまったく同じものだった。僕はそこに懐かしい温かみを感じることができた。

「さあ、もっとよく見るんだ」とそこで声が言った。

するとその青い核の中心が割れ、その中にさっきと同じような黒い塊が現れた。それは**死の塊**だった。再びこれが現れたのだ。僕は混乱してしまった。彼の精神の核の中に、死が存在している。それは確かに美しく（つまり黒く）輝いてはいたものの、明らかに死の領域に属するものだった。精神の中心に、死があるということなのだろうか？

僕がそう思って眺めていると、やがてその塊も縦に割れて、中にまたさっきと同じような青い光が現れた。彼の**精神の核**だ。一体どうなっているのだろうか？ これじゃあ切りが

ないじゃないか。これが永遠に続いていくのだろうか？

僕は目を閉じようとした。この果てしのない堂々巡りを見ているのが、心底つら辛くなったからだ。しかしあの声があった。「目を閉じてはいけない」。そして無理矢理僕の目を開かせた。

どうやってそんなことをやったのかは分からないが、僕のまぶた瞼は完全に開かれていた。もはやまばた瞬きすらできない。視界の中心には永遠に続く黒と青の輝きが交互に現れ、その周囲には明るいメラメラした炎のようなものがあった。炎？と僕は思った。一体何が燃えているんだろう？

でもそれに気付くのに時間はかからなかった。なぜなら燃えているのは僕自身だったからだ。僕は目でその生と死の交互の現れを見、そして身体は焼けつくような熱ささらに晒されていた。いや、「焼けつくような」という表現は妥当ではない。僕は実際に焼けついていたからだ。

何が起きているのかよく分からなかった。僕は彼の部屋にいたはずなのに、今ではこうして燃え上がっている。このままでは僕の肉体は完全に燃え尽きてしまうだろう。全身からたくさんの汗が流れたが、それもすぐに蒸発してしまった。皮膚が焼け、肉が見えた。でもそれもすぐに焦こげ落ちてしまった。僕は骨だけになったが、それでもなお視線はあの青と黒の——生と死の——光の現れを見つめていた。周囲には赤い炎が広がっていた。これは何なんだ？と僕は思った。一体何が起きているんだ？

「それがつまり生きるということなのさ」とどこかでまたあの声が聞こえた。でも僕はもう何も聞いてはいなかった。僕はもう僕ではなかった。僕の肉体は完全に焼け落ちてしまっていて、骨すらも残っていない。僕は何者でもなかった。生きてもいないし、死んでもいない。とっくに眼球は溶け落ちていたはずなのだが、なぜかあの光だけは見えていた。青い温かな光、そして黒い冷たい光。生きることと、死ぬこと。それはどこまでも交互に続き、果てというものがなかった。その奥に何があるんだろう、と僕は思った。何か価値あるものが存在するんだろうか？ 追求するだけの価値のあるものが。でもその疑問もすぐに消えてしまった。僕自身と一緒にどこかに消えてしまったのだ。あとに残ったのは、いつまでも燃え続ける一つの炎だけだった。

目を覚ますと、カーテンから朝日がこぼれていた。時計を見ると、午前の五時半だった。僕は椅子に腰かけたまま眠り込んでいたようだった。だとすると、あれは全部夢だったのだろうか？ 僕の中には、まだ燃え続ける炎の感触が残っていた。そしてあの交互に続く青と黒の光。

僕は椅子に座ったまま両腕を伸ばして、こわば強張った身体をほぐした。自分が今、こうして肉体を持って動いているということが、なんだか不思議に思えた。僕は一度死んだのではなかったか。完全に燃え尽きたのではなかったか。

でもどれだけ時間をかけたところで、結局何が起きたのか理解することはできなかった。

彼らには彼らの正義があるのだ、とふと僕は思った。たとえそれがどんな形であれ。

とりあえず僕は、今自分がこうして生きていることを事実として受け入れることにした。そうしないとそこから先の物事がどこにも進んでいかないと思ったからだ。しかし心の奥深くでは、まだ僕はその確信を持てずにいた。つまり「自分が生きている」ということを自明のこととして捉^{とら}えることができなかつたのだ。とりあえずこうやって身体を動かしてはいるものの、そんなのはただの見せかけに過ぎないような気もした。僕は首を振った。でももしそうだったとして、一体僕に何ができるというのだろうか？

そこでふとベッドの方に目をやった。そういえば彼はどうなったんだろう？ 彼の左腕は無事だったのだろうか？ でもそこに彼の姿はなかつた。そこにはただ、人型の虚ろなへこみがあるだけだった。

ぼんやりと無人のベッドを見つめていると、後ろのドアが開いて当の彼が入って来た。彼は淹^いれたてのコーヒーを大きなマグカップに入れて飲んでいて、コーヒーの香ばしい香りがこちらにまで漂ってきた。彼は言った。

「君も起きたか」

そして窓の方に行き、閉まっていたカーテンを片手で開けた。朝のまぶしい光が鋭く部屋に差し込んだが、僕は目を閉じなかつた。なにしろそれは新しい一日の、まったく新しい日の光だったのだから。

「まるで生まれ変わったような気分だ」と彼は言った。そしてカップを窓枠に置いて一度大きく伸びをした。そして「君はどうだ？」と僕に訊いた。

でも僕は何も答えることができなかつた。言葉はどこかに消えてしまったようだった。僕は彼の方を向いたが、実をいうと彼のことを見ていたわけではない。というのも僕は目の奥で、まだあの永遠に続く青と黒の光を追いかけて続けていたからだ。